

## 審査の結果の要旨

論文提出者氏名 井上貴子

本論文は、イギリス領インドにおいてヨーロッパの音楽学がインドの音楽研究に適用されていく過程と、そのなかで培われたインド音楽観が芸能の衰勢に及ぼした影響を考察するものである。本論文は主に二つの課題を扱っている。第一に、帝国支配下のインドの社会的文脈のなかで、当時のイギリス人及びインド人知識人によるインド音楽研究を文献資料から捉え直すことである。第二に、このように形成されたインド音楽観やそれに基づく文化政策が、独立後のインドにおける芸能の存続や衰退を決定づけたことを文献資料や現地調査をもとに実証し、近現代のインドにおける芸能のあり方を明らかにすることである。

本論文は序論、第一部「英領インドの音楽学」(第一章～第四章)、第二部「タンジャーヴールのテルグ語芸能」(第五章～第七章)、結論、参考文献、付録(地図・資料・写真)から構成されている。目次などを含めて総計 528 頁、本文のみで 400 字詰め原稿用紙約 1500 枚の分量に相当する。以下、それぞれの部分の概要を紹介する。

第一章「東洋学の時代」は、18 世紀末から 19 世紀末までを扱い、イギリス人のインド音楽観や、S.M.タゴールやチンナスワーム・ムダリヤールをはじめとするインド人知識人による初期の音楽研究を取り上げている。第二章「比較音楽学の時代」は、比較音楽学の方法を採用した 19 世紀末から 20 世紀中葉までのインド音楽研究を分析している。ここでは、比較音楽学者が、セント法のような、西洋古典音楽を基準として生み出された「科学的」かつ「合理的」な研究方法を採用したことや、当時の録音技術の進歩によって、芸能が上演される文脈から音楽のみを取り出して分析することが容易になり、音楽学の領域が確定されていったことが指摘されている。第三章「南インドの音楽学——民族音楽学の時代へ」では、1930 年代から 50 年代にかけての南インドに焦点が当てられ、全インド、南インド、タミル地方というように様々なレベルにおいて独自の音楽学の構築を求める動きが展開していたことが論じられている。また、この章の末尾ではイギリス領インドにおける音楽学の特徴がまとめられ、「科

学」としての音楽学の確立をめざす動きや、「芸術至上主義」が強化されていく過程が明らかにされている。第四章「独立後の文化政策」では、中央政府とタミルナードゥ州政府の文化政策が、音楽学や「芸術至上主義」との関係を中心に論じられている。

第二部では、まず第五章「タンジャーヴールの芸能史」でタミル語文化の中心地であったタンジャーヴールにおける芸能の担い手とパトロンとの関係、芸能を取り巻く社会状況がまとめられている。第六章「ティヤーガラージャ・アーラーダナー」は、マラーター支配末期に活躍した音楽家ティヤーガラージャの命日に行われる儀礼的芸能に焦点を当て、これが20世紀に入ってから南インドを代表する音楽祭へと発展した過程を明らかにしている。第七章「バーガヴァタ・メーラ」は、前章とは対照的に、今日までに大きく衰退した儀礼的芸能の事例として、テルグ語舞踊劇のバーガヴァタ・メーラの変遷を論じている。これらの分析を通じて、インドの社会変動のなかで芸能の存続を決定づける重要な要因としては、芸能が「芸術」としての自律性を獲得することや、担い手がカーストや宗教、性別などを問わず「民主化」されることがあると指摘されている。

以上のような内容の本論文は、近現代のインド音楽・芸能の変遷という先行研究の少ないテーマを扱った画期的な研究成果である。植民地期以降のインドの音楽研究の時系列的な変化を豊富な文献から明らかにすると同時に、現地調査で収集した芸能の実際のあり方に関する様々な形態の資料をもとに、その特徴を詳細に表したことは、本論文の重要な功績である。

また、本論文はヨーロッパで成立した音楽学が非ヨーロッパ世界に与えた影響を分析したものであり、広く「音楽学」そのものを問い直している点でも意義をもつ。植民地期以降のインドにおける「芸術至上主義」台頭の過程を明示したことは、音楽・芸能をめぐる認識そのものを再検討するための重要な示唆を与えている。

さらに本論文の意義として、インドのなかでも南インドに注目し、従来の北インドを中心としたインド音楽に関する記述とは異なる新たな視点を提示した点があげられる。全インド、南インド、タミル地方という様々なレベルにおける独自の動きが明らかにされると同時に、国家に対しては「多様性」の側にあ

る地方レベルにおいて、地方内部の「多様性」を抑圧する動きのあることを指摘し、インドにおける「統一」と「多様性」の概念を問い直すものとなっている。

むろん欠陥がないわけではない。そのひとつは、「芸術の自律性」「芸術至上主義」の概念がややあいまいである点である。審査員からは、芸術の自律性には多様なあり方が存在するとの指摘や、知識人層の音楽観や芸術至上主義の影響をいかに評価すべきかについて、具体的な質問がよせられた。また、「芸能」という概念枠組み自体を歴史的に捉え直すべきであるとの指摘もよせられた。さらに、インド、あるいは南インドにおける音楽・芸能の変遷の特徴を、他地域との比較を視野に入れながら議論することや、芸能の経済的側面を考察することも今後の課題として挙げられた。しかしながら、これらの問題点は、本論文が博士学位論文としてきわめて水準の高いものであることを否定するような性格のものではない。したがって、本審査委員会は全員の一致で本論文が博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。